

## 中島敦『李陵』論

二六八

渡 邊 ル リ

中島敦『李陵』（昭18・7『文学界』）は、作者の早い死によって題も未決定のまま草稿として遺されたことに加え、一・三章で李陵の生を描き、二章で司馬遷の生を描くという構成のため、主人公・題名決定の問題と並行して作品構造と主題が論じられてきた。近年村田秀明氏が『中島敦『李陵』の創造——創作関係資料の研究』（平11・5明治書院）において、中島が『御台所當座帳』（神奈川近代文学館蔵）に記入した所謂『李陵』年表<sup>2</sup>と原稿・典拠とを対照され、作品成立過程を検証されたことは、作品構造の解明において深く教えられるところであった。本稿では、原稿に見られる加筆・改訂と典拠からの改変をふまえて、作品『李陵』の人物造形の意味を解明し、作品主題を明らかにしたい。

### 一

作品『李陵』は、『漢書』『李廣蘇建傳』『匈奴傳』、『史記』『李將軍列傳』『太史公自序』、『文選』『答蘇武書』『任少卿報書』等

を典拠とする。現在日本大学法学部図書館所蔵の中島の蔵書中、『四部叢刊 百衲本二十四史』の『漢書』（中華民國十九年八月初版商務印商館）には、朱墨による句点・傍線・訂正・圈点等の書込みがあるが、『李廣蘇建傳』中、司馬遷が李陵を弁護する言葉、蘇武が自分に降伏を勧める衛律を罵る言葉、李陵が漢に還る蘇武に語る言葉などに、圈点（朱筆）が打たれている<sup>3</sup>。村田氏は前書で『四部叢刊』が中島の父田人氏の購入によることを述べ、

漢籍の書き入れについて、中島敦の令妹折原澄子氏によると、父や伯父などの書き入れはほとんどが朱筆であり、ペンや鉛筆による書き入れは中島敦によるものであるとのことであった。なお、敦は父の蔵書を利用しており、父田人氏はそのことを喜んでおられたということであった。

とされる。この『漢書』中の書入れはすべて朱筆によるものであり、『本紀』『表』『列伝』中には圈点も数多く打たれている。誰の手になるかという断定は困難であるが、『李廣蘇建傳』中の圈

点には『李陵』の主題に深く関わるものが見られ、父か伯父の手になるならば、中島敦が史料として読む際、同じ箇所注目したと考えられる。

作品『李陵』の語り手は、漢代の地理を「戈壁砂漠」<sup>ゴビ</sup>「阿爾泰山脈」<sup>アルタイ</sup>といった現代の名称を用いつつ説明し、「漢書の匈奴傳には（略）記されてゐる」「日本の君臣道とは根柢から異つた彼の國のこととて」等と、前漢時代の物語を史料に基づいて当代の日本の読者に語る態度を取る。その上で、例えば「武帝は（略）同じく庸主ではなかつた隋の煬帝<sup>ようてい</sup>や始皇帝などと共通した長所と短所とを有つてゐた」という箇所の傍線部が、原稿で「ルキ十四世や平清盛」から「始皇帝」に改訂されていることから、作品世界を古代中国に限定する意図が窺える。

これまで作品論において、勝又浩氏（『李陵の構図』昭46・3『日本文学』）が、登場人物の生が「集合し交差して織り上げて行く世界」を重視され、濱川勝彦氏（『李陵』昭51・3『中島敦の作品研究』所収 明治書院）が、中島の初期作品以来の「重層的（複眼的）手法」を指摘されて以後、三人乃至四人の登場人物の生の関係性が論じられてきた。中でも李陵と司馬遷を主要人物とする論が顕著であるのは、まず蘇武の描写が李陵の視点を通したものであるのに対し、李陵は一・三章で、司馬遷は二章で内面にまで分け入っ

て描出されていること、そして構想段階での作品題のメモと思われる「漠北悲歌」（断片三十）と、「莫北悲歌」を取消線で消した上に「李陵・司馬遷」と書かれた（断片二十九）が残されていることが主要な根拠となっている。「漠北悲歌」があらわす李陵の生から「李陵・司馬遷」へと、李陵と司馬遷を作品の中心に据えようとする作品構想の変化を読み取る故である。例えば木村東吉氏（『李陵の構想』昭53・5『日本文学』）は、作品執筆中に作者の司馬遷への関心が大きくなることによって李陵と司馬遷を「対蹠的関係として捉える構想が生まれた」とされ、藤村猛氏（『李陵』再説）平10・12『中島敦研究』所収 淡水社）は、「『李陵』の初期構想が李陵を中心とするものであり、中途の構想が李陵と司馬遷の二者を中心とするものであった」とされる。

作品『李陵』で、李陵は「麾下を失ひ全軍を失つて、最早天子に見ゆべき面目は無い」と戦場に戻ったにも関わらず「失神」したまま囚われる。しかし典拠『漢書』『李廣蘇建傳』の李陵投降の記述は、「陛下に報ずるの面目無し。遂に降る」である。中島は、典拠での意識的な投降の理由「報陛下無面目」を、李陵の戦死の決意の現れに置換え、捕虜となったのは李陵自身不可抗力であったように改変している。また作品で司馬遷は李陵弁護の際、死刑は予期しても宮刑の屈辱を予期しておらず、受刑後「痛憤と

煩悶」に苛まれる。そして当初平和使節であった蘇武も、副使が匈奴の内紛に連座したため、囚われる辱めを逃れようと自刃したが、匈奴の医術により「不幸にも」蘇生したとされる。つまりこの三人は、各々が自らは欲しなかった筈の生を生きているのである。

李陵と司馬遷の生は所謂「李陵之禍」事件を接点とするものの、作品中出会う場面はなく、独立して描かれる。にも関わらず語り手は、李陵の家族が戮された際、「司馬遷の場合と違って、李陵の方は簡単であった」と司馬遷と李陵とを対置し比較している。では、司馬遷と李陵とでは、何が違ったのであろうか。

宮刑以前の司馬遷の「修史」に関わる記述をまとめれば、(一) 彼自身の観察眼や筆力の充実 (二) 漢の朝廷と「時代」による「史の出現」の要求 (三) 父談よりの必ず完成すべしとの遺言という三点が呈示されており、司馬遷の筆力や意志が仕事に着手すべく熟していたことと共に、彼個人を超えて、時代が史の出現を求めていたと語られている。さらに、過去の人間の生を「述べる」行為は、「項羽本紀に入る頃から」、史上の人物が彼に、あるいは彼が史上の人物に「のり移りかねない」という、司馬遷自身の意識を超えたところでなされる「不安」を暗示されていた。しかもそれは、「異常な想像的視覚」による「生気潑刺たる述べ方」であったという。司馬遷が叙述する「歴史」は、歴史の渦中にお

いて傑出した個人に「憑依」し、その身になって意思や心情を語るものであり、宮刑以前は、司馬遷自身その方法に確信が持てずにいたのである。

司馬遷は「史實を扱つてゐる中に」、「人間にはそれ／＼其の人間にふさはしい事件しか起らないのだといふ一種の確信のやうなもの」をもつようになつていた。しかも「文筆の吏ではあつても當代の如何なる武人よりも男であることを確信してゐた」自己が、皮肉にもその生き方に徹して行なつた「李陵弁護」によつて屈辱的な刑を受けたという意味で、宮刑は司馬遷にとって恥辱である以上に、自身の人間観を根底から揺るがす運命であつた。

宮刑後数日間の「痛憤と煩悶」の中で、司馬遷は「今度の出来事の中で、何が——誰が——誰のどういふ所が、悪かつたのだ」と「思索」し、「日本の君臣道とは根柢から異つた彼の國のこととて、當然「先づ、武帝を怨」み、一時は「怨激」に支配される。しかし、その「狂亂の時期」が過ぎると、「歴史家としての彼が、目覺めて來た」という。原稿のこの箇所は次のようになっている。  
暫くの狂亂の時期の過ぎた後には、<sup>\*1</sup>

しかし、<sup>\*2</sup>「<sup>\*3</sup>史家としての彼は、<sup>\*4</sup>君主としてのが、目覺めて來た。<sup>\*5</sup>」

儒者と違つて、先王の價值にも『史家的な割引』<sup>所謂</sup>をすることを知つてゐた彼は、後王たる武帝の評價の上にも、私怨<sup>\*</sup>のために狂ひを來たさせることは無かつた。何といつても武帝は

\* 1 欄外左上から矢印で挿入指示

\* 2 「彼」までペン書き

\* 3 「は」以下、鉛筆書き

\* 4 取消線・文字共に鉛筆書き

\* 5 行間に記入

\* 6 字の上から鉛筆で「私怨」と記入

図 1



語り手は、司馬遷が歴史家として武帝の歴史における評価を確認した際、武帝への「怨懣」であつた感情を「私怨」と表現させている。はじめ「怨懣」であつたものが、歴史的認識の回復と共にそれを「私怨」と再確認し、その上に司馬遷の思考を展開させるところに、語り手に導かれた司馬遷の認識の転換を読むことができる。この「私怨」の文字の下は、図1のように、「個人」と書きかけた跡がある。恐らく中島は「個人的な怨み」や「個人的感情」といった語を書きかけて「私怨」と書き直したのであろう。

「私」とは「個人。公の對。」『大漢和辞典』である。この文脈では、上から書かれた「私」は、「個人」と、その言わんとする所は同じであるが、「個人」が「社会、又は公衆に対して一人をいふ」『大漢和辞典』のと比較すれば、「我慾」「秘密」といった意を含み、「公」の概念に対する「私」の方が、相応しいということであらう。「公」である「歴史的認識」に対して、「武帝への怨み」の「私」性をより明確にしたのである。

司馬遷は、顧みて「正しい事しなかつた」と思える行為が、「士たる者の加へられるべき刑ではない」「完全な悪」である結果を生んだことを、「唯、「我在り」といふ事實だけが悪かつた」のだと考える。「所詮己は牛にふみつぶされる道傍の虫けらの如きものに過ぎなかつた」<sup>⑦</sup>にも関わらず、正義を行わずにおれない自己であつた故である。だが司馬遷は、「我」はみじめに踏みつぶされたが、修史といふ仕事の意義は疑へなかつた」という。我身から「男」である状態が現実的に失われたのは癒えぬ傷だが、意識を超えて内側から自己を動かす何物かが存在した、それが「修史の意義」である。生きることは苦痛であつたが、司馬遷は自己を死んだものと見なし、「書写機械」として生きようとする。

原稿ではこの決意を、当初「さうとも思はなければ生きていけない。生きて行けば行けなければ」と書いた部分を消し、「修

史の仕事は必ず続けられなければならぬ」↓「修史の仕事のツツケラれるためには如何にたへがたくとも生きながらへねばならぬ」↓「生きながらへるためには、どうしても、そのやうに完全に身を亡きものと思ひ込まねばならぬ必要があつたのである」という順序で思考させるよう改訂している。「修史の仕事が続ける」ことを「生きる」ことに対し、絶対の価値を置く姿勢に変えているのである。

司馬遷の場合、「男」「士」であるという意識は倫理的であるが、自己はいかにあり、現世の局面に自己がいかに対するかという「我」の意識の次元を超えるものでない。だが、「修史」とは、「男」「士」としての価値意識を超えたところで、「書く」行為であつた。宮刑後、司馬遷は「此の世に生きることをやめ」「書中の人物としてのみ活き」る。しかも語り手は、史記の人物の中でも、魯仲連、伍子胥、蘭相如の名を挙げ、さらに屈原の「憂憤」を敘して引用した「懷沙之賦」が、司馬遷には「どうしても己自身の作品の如き氣がして仕方が無かつた」と語る。苦痛というあり方にのみ残された司馬遷の私の意識も、史上の人物の苦悩に響合うため必要であつたのである。「修史」が、史上の人物に乗り移るというあり方で本人の意識も超えて成し遂げられたところとところが、「任少卿報書」中の「詩三百篇は大底賢聖発憤の爲作す

る所なり」(「太史公自序」中にも同文あり)に依拠する所謂「発憤著書」説とも違う、中島の独創であつたのではないか。「我」の現世的な存在意義を否定し、他者に成り代つて、その成就しえなかつた志を語ることで、司馬遷は自己の存在を活かし得た。公的な「修史」の意義に対して、自己の「怨懣」を「私怨」と転換することによって、司馬遷はそれを実現したのである。

## 二

李陵が登場する第一章と第三章とは、その性格づけと描写法に大きな違いが見られる。迷いのない武人として漢軍を率いる李陵を行動によって描く一章と、匈奴の捕虜となつて様々に悩む李陵の内面を辿る三章と。対匈奴戦を中心とする第一章は、「李廣蘇建傳」の緊迫した戦闘情況の記述を活かし、心理描写を抑制する傾向が見られる。では、一章における李陵の行為と三章における行為との連関・対応は、どのように意味づけられるであろうか。

一章で李陵は兵についできた女達を斬るよう「カンタンニ」命じる。匈奴に軍の内情を告げ漢軍を窮地に陥れる管敢は、前日副官韓延年に辱められたという典拠の理由に加え、中島は「鞭打られた」とし、さらに斬に遭つた女の一人が管敢の「妻だつたのだ」とも云ふ」と新たな因果関係を創作している。女たちを斬らせた

ことは匈奴戦に賭けた李陵の覚悟の深さを表すものと読めるが、第三章で家族を戮され匈奴に寝返った李陵の行動は、ならば管敢との違いは何か、と問われねばならないだろう。また第三章で李陵は「單于の首でも」取って胡地を脱出することを目論むが、これも一章で單身單于を狙って果たせなかったこととの呼応において読む必要がある。

「失神」して戦死すること叶わず、捕虜として目覚めた時、李陵は即座に自刎するか、單于の首を狙うかという選択のうち、後者に決めて機会を窺う。李陵は單于と差し違えても、漢に知られることなく終われば無意味と考え、單于の首を持って胡地を脱する機会を窺うが、その間にも、自身を士として遇する單于を「男」だと認め、熱心な射の弟子となった單于の長子左賢王に「友情のやうなもの」を感じ始める。

李陵が対漢戦には加わらず、対東胡戦の軍略には協力して、單于の首を狙っていたというこの時期、匈奴に寝返っていた李緒という人物に間違われ、李陵が漢に残した一族が戮される。この報を聞く李陵を、語り手は「司馬遷の場合と違って、李陵の方は簡單であった。憤怒が凡てであつた」と解説する。この「憤怒」の内実が、「今迄我が一家は抑々漢から、どの様な扱ひを受けてきたか？」以下、一族への漢朝からの不当な仕打ちに対する憤りと

して、詳しく語られて行く箇所（原稿裏に書かれて挿入）を、典拠「李廣蘇建傳」の記述と対照してみる。（典拠中の点線 a s d の記述が、作品中改変された箇所傍線 a s d を付した）

中島敦『李陵』	『漢書』『李廣蘇建傳』
<p>〔李廣〕</p> <p>彼は祖父李廣の最期を思つた。（略）</p> <p>名將李廣は数次の北征に大功を樹てながら、君側の姦佞に妨げられて何一つ恩賞にあづからなかつた。部下の諸將が次々に爵位封侯を得て行くのに、廉潔な將軍だけは封侯はおろか、終始變らぬ清貧に甘んじなければならなかつた。</p>	<p>〔李廣〕</p> <p>元狩四年、大將軍票騎將軍大いに匈奴を撃つに、廣數ば自ら行くことを請ふ。上老爲るを以て許さざるを、良久しくして乃ち之を許し、以て前將軍と爲す。</p> <p>大將軍青塞を出でて、虜を捕らえて單于の居る所を知り、廻ち自ら精兵を以て之を走らせんとし、廣に右將軍の軍と並びて、東道を出でしむ。東道少回遠にして、大軍にて行くに、水草少なく、其の勢屯行せず。廣辭して曰く、「臣の部は前將軍と爲すに、今大將軍は乃ち臣を徒して東道に出でしめ、且つ臣は結髪してより匈奴と戦ひ、廻ち今一たび單于と當るを得て、臣前に居りて、先に單于に死せんことを願ふ。大將軍陰かに上の指を受け、李廣の數奇爲るを以て單</p>

最後に彼は大將軍  
衛青と衝突した。

流石に衛青にはこの老將をいたはる氣持はあつたのだが、その幕下の一軍吏が虎の威を借りて李廣を辱しめた。憤激した老名將は直ぐにその場で――陣營の中で自ら首刎ねたのである。祖父の死を聞いて聲をあげてない少年の日の自分を、陵は未だにハツキリ憶えてゐる。……

于に當らしむることなかれ、恐らくは欲する所を得ず。是時公孫敖新たに侯を失ひ、中將軍と爲り、大將軍亦た敖をして俱に單于に當らしめんことを欲し、故に廣を従す。廣之を知りて、固辭す。大將軍聽かず、長史をして廣の莫府に封書を與へしめて曰く「急ぎ部に詣りて、書の如くせよ」と。大將軍に謝せずして起ちて行き、愠怒を意象し、部に就きて、兵を引きて右將軍食其と軍を合して東道を出ず。惑ひて道を失ひ、大將軍に後れる。大將軍單于と接戦するも、單于遁走し、能く得ずして還る。南して幕を絶し、廻ち兩將軍に遇ふ。廣大將軍に見えて、還りて軍に入る。大將軍長史に繡繆を持たせて廣に遣はしめ、因りて廣、食其道を失ふの狀を問ひて、曰く「青上書して天子に軍を失ふの曲折を報じんと欲す」と。廣未だ對へず。大將軍の長吏廣の莫府に上簿を急責す。廣曰く、「諸校尉罪亡く、乃ち我自ら道を失ふ。吾今自ら上簿せん」

〔李敢〕

陵の叔父、(李廣の次男)李敢の最期はどうか。彼は父將軍の慘めな死について衛青を怨み、自ら大將軍の邸に赴いて之を辱しめた。大將軍の甥に當る票騎將軍霍去病がそれを憤つて、甘泉宮の獵の時に李敢を射殺した。武帝はそれを知りながら、票騎將軍をかばはうがために、李敢は鹿の角に觸れて死んだと發表させたのだ。……

と。

莫府に至り、其麾下に謂ひて曰く「廣結髮してより匈奴と大小七十餘戰し、今幸ひに大將軍に従ひて出でて單于の兵に接するに、大將軍廣の部を従し行きて回遠し、又迷ひて道を失ふ、豈に天に非ざらんや。且つ廣年六十餘、終に復た刀筆の吏に對する能はざるかな」と。遂に刀を引きて自ら剄る。(略)

〔李敢〕

大將軍青の其の父を恨ましむることを怨み、廻ち大將軍を撃傷し、大將軍匿して之を諱む。居ること何も無く、敢上に従ひて雍にいき、甘泉宮に至りて獵し、票騎將軍去病敢の青を傷つくるを怨みて、敢を射殺す。去病時方に貴幸にして、上諱と爲し、鹿の之を觸殺すと云ふ。

〔李蔡〕

(記述なし)

〔李蔡〕

廣死して明年、李蔡丞相を以て冢地を陽陵に賜り當に二十畝を得んとするに、蔡三頃を取り頗る賣りて四十餘萬を得、又神道外の墻一畝を盜取して其の中に葬るに坐して、下獄に當り、自殺す。

「李廣蘇建傳」において、衛青は李廣の老齡と不運を理由に單于と戦わせまいとした武帝の意を受け、李廣に迂遠な東道を行くよう命じた。單于との対決を望んだ李廣は、心ならずも東道を取った挙句、道に迷って單于を取り逃がすこととなった。衛青の長史が「上簿を急責」したのに対し、李廣は「我自ら道を失ふ」と、独り幕府に赴いて運命を嘆じ、最早刀吏の取り調べを受けることはできぬと首刎ねたのであった。ところが、中島の『李陵』には、李廣が道に迷った失策は書かれず、衛青と「衝突した」とのみ記される。また取調べに際して糲糲を持たせた衛青の行為は、「流石に衛青にはこの老將をいたはる氣持はあつた」と婉曲に語られる。そして典拠で李廣が、自らの責任と不運を自覺し、その報告において自ら身を処したのに対し、作品『李陵』では、一軍吏に辱められたために、「憤激」して「その場で」「自ら首刎ねた」という、より感情的な行動が語られている。

そもそも典拠で李廣の死は李廣伝に描かれており、続く李陵伝中の李陵投降の引き金とされてはいない。そして作品『李陵』の李廣の死も、漢朝や武帝に対しては勿論、漢を怨み、裏切る性格のものではない。にもかかわらずそれが李陵にとって匈奴側にくく契機となるのは、その怒りが、一族を戮されたことと共に、「祖父の死を聞いて聲をあげて泣いた少年の日の自分」という、当時の自身の悲しみに還る性格のものであったからである。〔李陵』年表」中、「元狩4」前「119」年の項の「李廣自刎。青・去病、北征。A」の下に、写真での判別は困難であるが鉛筆で「陵15」と記入されている(図2)。村田氏が指摘されるように、李陵の設定年齢のメモと

図2



見られる。)李陵が匈奴側につく行為は、決して祖父の意志の実現ではなく、自己の内部に生まれた、一族を戮された憤怨によるものである。

叔父李敢も、「李廣蘇建傳」では衛青を「撃傷」しており罪が深いが、中島は「辱しめた」と、漠然とした表現に変えている。さらに典拠中の李廣の従弟李蔡が土地を盗んだ責を負って自殺し



たという記述に、作品は一切触れていない。つまり、李陵の回想として語られる一族の死の情況は、一族にも責任のある箇所が削除され、曖昧な記述になり、李廣の死に際しての屈辱が強調されて李陵自身の漢朝への怨みに繋がっているのである。

一族を戮された李陵の憤怒は、その本人としていかに無理もない真情として吐露される。が、このような典拠の改変の上で、司馬遷とは違って「簡單」であつたとされるのは何故か。

司馬遷の場合と違って、李陵の方は簡單であつた。憤怒が凡てであつた。(無理でももう少し早くかねての計畫——單于の首でも持つて胡地を脱するといふ——を實行すれば良かったといふ悔を除いては) たゞそれを如何にして現すか、問題であるに過ぎない。

憤怒の表現として李緒を殺害した意味は措くとして、問題は原稿で後から挿入された(一)内の「悔」である。「單于の首でも」の「でも」は、「考えられる消極的な条件が、ともかく成立することを表わす」『新明解国語辞典』第六版) 副助詞であり、実は賓客として匈奴の生活が始まった頃にも「隙があつたら單于の首でも」狙っていたと語られていた。だが、單于の首こそは、「消極的な条件」どころか李陵の究極の目標であつた筈で、他に代る目標もない。一章で匈奴軍に包囲された夜、李陵は単身「あはよく

ば單于と刺違へる」ため敵陣を窺い、果たせず敗れ、そしてその結果が現在も單于を狙い続けて果たせない現状ではなかったか。それを「單于の首でも」と容易であるかのように大言壮語するのは、当初の「敗軍の責を償ふに足る手柄を土産として」という決心が、單于の手で繩を解かれ賓客の礼を以て遇せられた時点で、既に李陵の中で比重を変えていたことを暗示する。また逆に、單于が「強き者」である李陵と李廣を讚美して「士を遇するため士を遇」し、長子左賢王と狩に出すほどの信頼を見せたことに對し、「首でも」とは淺薄であらう。狩の時に左賢王の首を取れる可能性はまだしもあつたと思われるが、左賢王に狼から救われ、共に羹を啜りつつ「友情のやうなもの」を感じた李陵は、想定もしていない。「單于の首でも」からは、その実行に対する切迫感の希薄さが読取れ、族滅時の(無理でももう少し早く計画を實行すれば)云々の悔いは、機会を窺っていると言ひ聞かせつつ匈奴に馴染みつつあつた自己に、李陵が無自覚であつたことを示唆していよう。

しかも李緒を刺殺した「翌朝」、「李陵は單于の前に出て事情を打明けた」という。この「事情」とは、無論これまで首を狙っていたことではなく、李緒を殺すに至った、人違いによって漢の家族が族滅されたという「事情」である。一時身を隠して再び呼戻

された時は「人間が變つたやうに」見え、「今迄漢に對する軍略にだけは絶対に與<sup>あずか</sup>らなかつた彼が、自ら進んで其の相談に乗らうと言出し」、躊躇なく單于の娘を妻に迎えたという。だが実は李緒殺害の翌朝に、李陵は匈奴で生きるべく、少なくとも李緒殺しの罪を逃れるために、單于の權威と自己への信頼を頼んだのであり、李陵の憤怒と怨みは自己が生き抜くことへと自然に作用したのであった。よって、漢への憤りは志ある自己を信じなかつた恨みであつたとしても、李緒の殺害は漢への裏切行為への憤り故とは言えず、族滅の原因ということに對してでしかない。

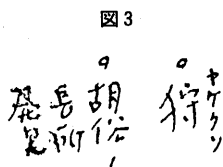
だが、實際對漢戦に従軍すれば、かつての部下の骨が埋められた地で「今の己が身の上」を思い、漢兵と戦う勇氣を失う。自らの心の声を聞くこともなく、現實に對応する決定が先になされ、結局はそれに徹することもできないのが、右校王李陵の「ハツキリしない」状態であつた。司馬遷が修史の仕事の為に生きようとしたのと逆である。しかしながら、母妻子を族滅されて「再び漢の地を踏むまいと誓つた」のも、對漢戦で左賢王の戦績を氣遣う己を発見して激しく責めるのも、出陣して部下が戦死した地を進めなくなるのも、また匈奴の我子に漢で殺された子の面影を想うのも、まさしく李陵が、身近な周囲の人物への情愛において鋭敏に反応する人間であることを意味している。しかし、それは当の

相手に対する「行為」には至らぬ、「心情」にとどまるものなのである。

中島が李陵一族の設定に改変を加えたのは、一族を一途に誇り愛する主観的な思いに価値観を支えられた、情に脆い李陵像を造形するためであらう。「疲労だけが彼の唯一の救ひ」という一瞬の解放感、その反動のように、自己の出自と過去を捨て去つたかのような現在の個的な我のみが、大自然たる天地に包まれる願望を表している。

それから己れは草の上に仰向けにねころんで、快い疲労感にウツトリと見上げる碧落<sup>へきらく</sup>の潔さ、高さ、廣さ。あゝ我もと天地間の一微粒子のみ、何ぞ又漢と胡とあらんやと不圖そんな氣のすることもある。

原稿(三章十一枚目)のこの場面が始まる箇所の上欄外には、図3のように簡条書きで「狩」<sup>ヤケツ</sup>「胡俗ノ長所発見」とメモされている。この駿馬を驅る行為は「狩」ではないが、作中、後に匈奴の「長所」を発見することと併せて、匈奴で李陵が抛り所とする二つの要素をここにメモしたものと推定される。「天地間の一微粒子」「何ぞ又漢と胡とあらんや」と思うことが、李陵には



「救ひ」でありうる。だから、「胡俗」の「粗野な正直さ」を認めるのは良いとしても、「考へてみれば」漢における「字」が「絶対に必要だといふ理由」は「何處にもないのであつた」という結論に至るのである。李陵自身、後に旧友任立政から「少卿よ」と「字を」呼ばれるにも関わらず。

語り手は、司馬遷と比較して李陵の心の位置を明示する。

司馬遷が陵の爲に辯じて罪を獲たことを傳へる者があつた。李陵は別に有難いとも氣の毒だとも思はなかつた。司馬遷とは、互に顔は知つてゐるし挨拶をしたことはあつても、特に交を結んだといふ程の間柄ではなかつた。むしろ、厭<sup>いと</sup>に議論ばかりしてうるさい奴だ位にしか感じてゐなかつたのである。それに現在の李陵は、他人の不幸を實感するには、餘りに自分一個の苦しみと闘ふのに懸命であつた。餘計な世話と迄は感じなかつたにしても、特に濟まないと感じる事がなかつたのは事實である。

確かに、さして親しくもなく遠方にあれば、これはあり得る感情かもしれない。しかし逆に、その程度の関係でありながら、死を覚悟して李陵を弁護した司馬遷を對置するとき、本当にこれで良いのかという極めて厳しい問いと共に、李陵の意識が身近な人々と自己の感情に収束していることが浮上してくる。

司馬遷が武帝を歴史的に評価し、自己を歴史認識において位置づけることによって、「怨懣」を「私怨」へと転換し、修史の意義を確信したのに対し、李陵は家族を戮された痛切な怨みのため、漢の武人としてあるべき自己を失つたままである。司馬遷が実生活捨てて書中の人物としてのみ生きるのに対して、李陵は自己を支える価値を失つた儘、周囲に反応する。李陵が自己を客観視するには、蘇武との再会を待たねばならない。

一章で、中島は、裏切者管敢の妻を斬られた恨みを創作した。妻の斬を怨んで匈奴に降り、軍に致命的な打撃を与えた管敢と、家族を戮されて匈奴に降り、対漢戦にも加わつた李陵と。人違ひという不幸な要因があつたとしても、その行為の質は全く違ふとは言えまい。一章での管敢の裏切りは、三章で族滅に憤る李陵を客観的に照らし出すための挿話と読むことができるのである。

### 三

李陵は、投降を肯んじない二十年來の友、蘇武の降伏を勧告するよう命じられる。李陵と蘇武との場面はすべて李陵の視点から描かれ、蘇武の主観が描かれないことは従来から指摘される通りである。が、語り手は蘇武が捕虜となる経緯を解説し、蘇武の辛苦については「持節十九年の彼の名と共に、餘りにも有名だから、

玆には述べない」と語る。確かに「忠臣」蘇武の逸話はより物語化されて平家物語等に見えるが、「李廣蘇建傳」にある、蘇武が自殺を図った際の「節を屈して命を辱めれば生くると雖も何の面目ありて漢に帰らんや」という「面目」についての発言が、何故作品には語られないのか。この理由については後述したい。

李陵が、蘇武に弁解せずに過去の事実だけを語り、蘇武の妻が子を棄てて他家へ行ったことは「流石に」言えず、降伏勧告をついにしなかったという描写は、従来指摘されるように、蘇武の兄二人の法に触れての自殺・母の死・妻の再婚を告げて「人生朝露の如し、何ぞ久しく自ら苦しむこと此の如きか」と降伏を勧める典拠の李陵とは、全く逆の造形である。特に、作品で「蘇武の答は、問ふ迄もなく明らかであるものを」「蘇武をも自分をも辱しめるには當らない」という理由で降伏勧告を一切しなかったと改変したことで、李陵は蘇武の意志の堅さを理解し尊重していることになる。しかし、「李廣蘇建傳」で蘇武が李陵の降伏勧告に対し、「臣の君に事ふるは、猶子の父に事ふるがごとし。子父の爲に死にて恨む所なし」と、臣としての武帝への忠誠を語る部分も——そこで李陵は「嗟乎、義士なり、陵と衛律の罪上りて天に通ず。」と涙と共に答えるのであるが——作品には語られないことになる。これについても後述したい。

以下、作品中李陵が蘇武をいかに見、自己をいかに考えるかを読み解いていくが、まず、蘇武がなぜ自殺しないのか怪しむ箇所については、原稿の加筆訂正を通して読む必要がある。

#### 李陵自

身が希望のない生活を自らの手で断ち切り得ないのは、何時の向にか此の地に根を下して丁

つた数々の恩愛や義理のためであり、又今更

死んでも 格別漢のために義を立てることにもしないからで

ある。蘇武の場合は違ふ。彼には係累もない

。漢朝に対する義信といふ奥から考へるなら、

何時迄も節杖忠を持して飢ゑるのと、直ちに節

杖を焼いて後自ら刎ねるのとの間に、別に差

異はなさうに思はれる。

引用部三行目、李陵が「何時の間に」か「数々の恩愛や義理」が「此の地に根を下ろして丁つた」というのは、自ら匈奴に降り、妻を娶った選択を成り行きだったと考えているのだが、語り手が周囲の他者への情に脆い李陵の性向を正確に描いていると言えよ

う。問題は、五行目の訂正前の記述が「又今更死んでも節を汚したことに変りはないからである」であったことで、最初の構想では、李陵は「節を汚した」という自覚があったことになる。それを死んでも「格別漢のために義を立てることにならない」からと改訂すれば、李陵の意識において「義を立てる」とは、漢がそれを認めるという結果が伴わなければ成立しえず、自己自身の問題としての「節」は問われないことになる。しかも「立てることにならない」とは、未だ漢のため「義」を立てる余地が残されているかのように考えているということである。「格別（ならない）」とは、「單于の首でも」と同じく、実行不可能なことに対して逆に大きく出る態度であろう。次に六行目、蘇武には「この地での係累もない」と考えるのは、捕虜に敵地で係累がないのを当然とすれば奇妙であり、「この地での」を挿入することによって、漢ではなく匈奴で家族をなした自己の行為を自然なこととして蘇武に対していることを明確化している。さらに七行目、「漢朝に対する忠信」の「朝」は後から挿入され、「忠信」ははじめ「義」を書いて消したものである。これはつまり、李陵の発想が故郷としての漢に対してではなく、その中央である「漢朝」（武帝）に対して武人が「忠」であるのかどうか、という関係に限定される方向に改訂されたということであろう。

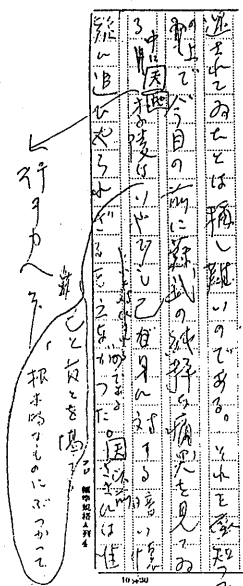
李陵は、蘇武が「誰一人己が事蹟を知つてくれなれども」「最後まで運命を笑殺し得た事に満足して死んで行かう」とするのを支えるのは「意地」だと考え、それに対して、自己が單于の首を狙いながら漢に「折角の」行為が聞こえないことを恐れ実行しなかったことを「冷汗の出る思いで」省みる。「今更死んでも格別漢のために義を立てることにならない」と考えていた李陵にとって「義」とは、「情」の伴わぬ形骸化したものになっていたのであり、それ故に蘇武の思いは「意地」だと見えたのである。

李陵は、南に戻ってから「崇高な訓戒」かつ「いらだたしい悪夢」である蘇武の存在に悩まされる。

李陵自身、匈奴への降伏といふ己の行為を善しとしてゐる譯ではないが、自分の故國につくした跡と、それに對して故國の己に酬いた所とを考へるなら、如何に無情な批判者と雖も、尙、その「やむを得なかつた」ことを認めるだらうとは信じてゐた。所が、こゝに一人の男があつて、如何に「やむを得ない」と思はれる事情を前にしても、斷じて、自らにそれは「やむを得ぬのだ」といふ考へ方を許さうとしないのである。飢餓も寒苦も孤獨の苦しみも、祖國の冷淡も、己の苦節が、竟に何人にも知られないだらうといふ殆ど確定的な事實も、この男にとつて、平生の節義を改めなければならぬ程のヤム

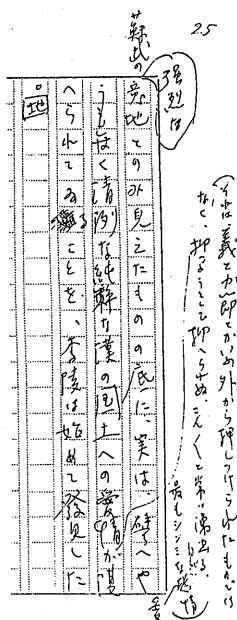
ヲエヌ事情ではないのだ。

これは原稿用紙裏に書かれ挿入されている。李陵が「匈奴への降伏」と呼ぶ行為は、自ら対漢戦の軍略に与った以上「裏切り」であろう。その上で李陵の漢に対する意識は、傍線部から、〈漢につくす自己と、それに酬いるべき漢朝〉の対応の中にあることが明確になる。『文選』『答蘇武書』には、「陵恩に孤くと雖も、漢も亦徳に負けり」という言葉もあり、傍線部は元々これが典拠であろう。李陵の漢への情を支えるのが、残した家族と自己の功績に酬いる国家であれば、漢朝の処分によって双方が失われた今、裏切りも「やむを得なかつた」。李陵には「平生の節義」以上の、漢に知られずとも守り続ける蘇武の「節義」が実感をもって想像できないため、蘇武の行為は謎である。蘇武の節義の底に生きた情愛が持続すると知るのは、自身も兄二人を自殺させられながら、



武帝崩御の報に号哭する蘇武を見た時であった。

引用三行目「天地」の位置に、四行目以降「天」以前には「から始めて発見した。地」まで挿入されたのは、李陵によってより深く解釈された蘇武の愛情の内容である。蘇武を内から支えるのは「清冽な純粋な漢の国土への愛情」であり、それは〈尽くす武人と酬いる国家〉という観点に立っていた李陵の発想を根底から揺るがす発見であった。李陵が蘇武の愛情を「義とか節とかいふ外から押しつけられたものではなく」と断るのは、李陵にとっての「義」や「節」が、一章で有能な武人として闘った時でさえ「漢朝」に向けられ「外から押しつけられた」ものであり、「抑へようとしても抑へられぬ、こんく」と常に湧出る「愛情と一体にはなりえなかつたことを示している。実は李陵にとっての内発的な愛情は、祖父や母妻子に対するものであったが、それは既に失



われている。

「李廣蘇建傳」中の「面目」についての蘇武の発言や「忠臣」蘇武の伝説、さらには李陵による降伏勧告に対する答えが、作品で語られなかったのは、蘇武の「義」がもとづく内実を、それまで「強烈な意地とのみ見えたものの底に」生きた「国土への愛情」があったのだと、李陵に「発見」させるためであろう。蘇武が慟哭したのは武帝の崩御に対してであるが、しかし李陵がそこに見出したのは、武帝に対する感情を超えた「漢の国土への愛情」であった。李陵自身は族滅によって「漢朝」に「憤怒」を抱いたたのであったが、「湧出る」蘇武の愛情は、武帝や漢朝を超えて「漢の国土」に向けられていたと李陵は知るのである。

李陵が蘇武に対しては、「譬へやうも無く清冽な純粋な」漢の国土への愛情を「発見」したにも関わらず、そこから翻って自己に対すれば、「いやでも己自身に対する暗い懷疑に追いやられざるをえない」のは何故か。李陵は蘇武の清冽純粋な心に「感動」すればするほど、「今一滴の涙も」浮かんでこない自己と、こうなるに至った過去の道程を間違っていたのではないかと疑う。蘇武が正しいならば、自己が過去のどこかで誤ったのだらうかと不安に追いやられながら、それがどこか、なぜなのかがわからないでいる状態が、李陵の「己自身に対する暗い懷疑」である。

李陵を帰漢させるため訪れた旧友任立政は、「少卿よ、多年の苦しみは如何ばかりだったか」「少卿よ、歸つてくれ」と李陵の「字」を呼ぶ。これこそ漢に属する者同士として「字」に篤い情をこめた言葉であって、字が絶対に必要な理由は「何處にも」ない、と考えるようになった李陵の或る性向を照らし出すものである。そう言えば、「李廣蘇建傳」で「陵字は少卿」とされる李陵は、作品冒頭で「騎都尉李陵」として登場し、以後も三章まで李陵とのみ記されて「字」は示されなかった。李陵の字「少卿」と呼ぶことは、漢に属する武人同士の関係をあらわすものとして、まず再会した蘇武が李陵を「騎都尉李陵少卿と認める」ところに記され、そして任立政との再会で、初めて「少卿よ」と呼びかけられるところに現れるのである。原稿で二度目の「少卿よ、」は「少卿。」から改訂されており、呼びかけであることが強められたものである。

任立政への李陵の返答「丈夫再び辱しめらるゝ能はず」が、「ひどく元気の無かつた」のは「衛律に聞えることを惧れたためではない」という箇所は、原稿で「惧れたためばかりではない」の「ばかり」が消されている。李陵は、「もはやどうにもならぬ事」という結論が、字を呼ぶ友の呼びかけに応えられる自分では既になくなってしまったためであると感じ取っているのである。

『李廣蘇建傳』中、任立政の匈奴訪問と蘇武帰漢の記述はそれぞれ、李廣傳の「昭帝立ちて」の直後と蘇建傳の昭帝即位後「数年して」の箇所に分かれているが、中島は原稿で任立政訪問の記述後、一行を空けて「後五年、昭帝の始元六年の夏」「蘇武が偶然にも漢に歸れることになった」と書き出している。帛書をつけた雁の話で蘇武の生存を單于に認めさせたという漢書の記述が作品でも語られる。ここで疑問となるのは、李陵が蘇武帰漢の可能性を皆無と感じていたように見える点である。李陵と親しいといえ單于が蘇武の死を主張する以上、蘇武の生存を漢使に告げる、また帰漢を單于に願ひ出るといったことは、任立政等との会見が衛律の監視下で行われたことから、匈奴への裏切りとして危険を伴ったであろう。ただ問いたいのは、李陵の心情である。

李陵の心は流石に動搖した。再び漢に戻れようと戻れまいと蘇武の偉大さに變りは無く、従つて陵の心の答たるに變りはないに違ひないが(略)

「流石に」とは、自身は匈奴に生きると決意した筈ながら蘇武の帰漢はなお打撃であつたということだが、この「偶然」が李陵にとつても思ひがけなかつたことを意味する。蘇武の存在が「一日も」「頭から去らなかつた」一方、李陵は蘇武の帰漢を願うことはできなかった。かつて左賢王の戦績を氣遣う己を発見して

「愕然とし」「激しく己を責め」たことと比較しても、違いは明らかであろう。李陵は蘇武に対して、安否を問ひ食品等を贈ることではできても、蘇武の心に即して帰漢を願うことがなかつた。蘇武に即して願うことは、司馬遷による李陵の弁護という行為を對置すれば浮上してくる可能性としての心情である。

併し、天は矢張り見てゐたのだといふ考へが李陵をいたく打つた。見てゐないやうであつて、やつぱり天は見てゐる。彼は肅然として懼れた。今でも己の過去を決して非なりとは思はないけれども、尙こゝに蘇武といふ男があつて、無理ではなかつた筈の己の過去をも恥つかしく思はせる事を堂々とやつてのけ、しかも、その跡が今や天下に顯彰されることになつたといふ事實は、何としても李陵にはこたへた。胸をかきむしられる様な女々しい己の氣持が羨望ではないかと、李陵は極度に懼れた。

ここに至つて、李陵が「天は矢張り見てゐた」と「肅然として懼れ」るのは、「暗い懷疑」の原因——蘇武にはある「漢の国土への愛情」が自身にはないこと——が、天によって断罪されるその正しさを認めるからである。既に李陵にとつて、蘇武の存在は「心の答」であつた。自己と蘇武とを比較して「暗い懷疑」をもつた李陵は、蘇武という存在を正とする絶対的な「天」の存在に氣



付くことで、自身の懷疑の所以がわかり、懼れる。李陵は「士」

であり続けることを内から情においても支える根拠が見出せなかったのである。だがここで、李陵は憤怒や怨懣に支配されることなく、「胸をかきむしられる様な」感情を「女々しい」と自覚する。

ここに李陵の苦しい転換を見るべきであろう。それでも「今でも己の過去を決して非なりとは思はないけれども」と、当時の自己に立ち帰れば、過去の選択は実感をもって現在に甦るため、李陵は「節義」を見失った武人となった内因と道を踏み違えた瞬間を見出すことができない。司馬遷のごとく「士」としての矜持と共に「我在りといふ事実」の否定にまで至る思索・反省に入れぬままである。『文選』『答蘇武書』では、「志未だ立たずして怨已に成り」「顧ふに國家我に於て已みぬ。身を殺すも益なし」と、漢の國家の自己への対応を怨み、匈奴に生き続ける意志が描かれるが、作品の李陵は「やむを得ない」という諦めの中で結果を受容し、羨望や未練を残したまま涙して舞う姿を蘇武に見せる。

いひたいことは山程あつた。しかし結局それは、胡に降つた時(なへん)の己の志が那邊にあつたかといふこと、その志を行ふ前に故國の一族が戮せられて、もはや歸るに由無くなつた事情とに盡きる。それを言へば愚痴になつて了ふ。彼は一言もそれについてはいはなかつた。たゞ、宴(たけなひ)酣(なみ)にして堪へかねて立

上り、舞ひ且つ歌うた。

傍線部で李陵は、單于の首を取って敗戦の責を償う「志」が、一族を戮された時点で意味を失つたのだと信じながら、実は、その「志」よりも、「一族のもとへ帰る」ことに心があつたということ、自身では意識せずに表しているのである。

「李廣蘇建傳」では、李陵は蘇武に思いを語る。

「今足下還歸せんに、名を匈奴に揚げ、功は漢室に顯はる。

古の竹帛に載する所、丹青にて畫く所と雖も、何を以てか子卿に過ぎんや、陵驚怯と雖も、令し陵の罪を貰し、其の老母を全うし、大辱の積志に奮ふを得せんとすれば、曹柯の盟を庶幾せんや。此れ陵の宿昔の忘れざるところなり。收めて陵の家を族し、世の爲に大戮すれば、陵尚ほ復た何をか顧みんや。已んぬるかな。子卿をして吾が心を知らしむるのみ。

異域の人、壹たび別るれば長く絶えん。」陵起ちて舞ひ、歌ひて曰く、「徑萬里、沙幕を渡る、君將と爲りて匈奴を奮はす、路窮りて絶え矢刃を摧く、士衆滅びて名已に隕つ。老母已に死して、恩に報いんと欲すと雖も將に安くにか歸せん。」陵泣下ること數行、因りて武と決す。

典拠波線部が、「言へば愚痴になつて了ふ」と作品では秘されることが、李陵の自己否定と呵責を表す。そして典拠からそのま

ま作品にうつされた李陵の歌の「將に安くにか歸せん」とは、生の意義を喪った自己を嘆く李陵の悲歌なのである。

李陵が蘇武・司馬遷と明らかに違うのは、自己個人の感情や意識を超えた価値を、信頼し精神的支柱とすることができなかった点である。ただし、この個人を超える価値とは、司馬遷が武帝をも歴史的に評価する眼を持ち、修史の意義が国家や時代を超えるものであったこと、また典拠に見られた漢朝への忠義に関する蘇武の発言が語られず、むしろ李陵がそれに囚われていたことが反省され、蘇武に「国土への愛情」を発見することから見ても、必ずしも国家に向かうものを意味してはいない。

家族を戮された憤怒に支配される李陵は、民族や国家に関わりなく、自分の身近な人物への情に脆いのであるが、祖父との関係においても、自ら身を処した祖父の意志を嗣ぐのではなく、祖父を失ったときの自己の悲しみに即して恨みに支配されるように、実は他者に即すよりは他者に対する自己の感情に従う性質をもつのである。李陵の情の脆さ、自己感情へのこだわりを弱さとして認めた上で、李陵自身には「やむをえなかった」としか思えなかった選択の中に、司馬遷や蘇武にはある、「自己を超えた存在を心から信頼し身を委ねる」志向が見出せないことを、厳しくあたたかく指摘した作品なのである。

明らかな自覚でなくとも、李陵自身にそのことを感知させるのは蘇武である。蘇武は「清冽な純粹な漢の国土への愛情」が「節義」の根底にあることを李陵に気付かせ、勇敢な武人であった筈の李陵の視点そのものが、義や節の意味を形骸化させたものであることを照射するのである。

李陵の悲劇は、運命が苛酷であったことではなく、苛酷な運命に対して思索しきれず対応し、その結果としての過去が厳然と横たわる中で、倫理的な「天」のもとにある自己の姿に目覚めていくことにある。その道程は、自己の「怨懣」を「私怨」と転換した上で、一国一時代を超えて史記を遺した司馬遷と対置され、蘇武の「漢への愛情」を「意地」と見誤った上で「漢の国土への愛情」だと気づく過程を経たものであるが、そこには自己への「懷疑」が、正しい自己認識を導く可能性も問われていよう。李陵がなぜ、生存の場を主体的に見出せないまま、匈奴の政治紛争に巻き込まれ、消えて行かねばならなかったかを、中島は、李陵の情に脆く自己感情に正直な、柔弱な一面に指摘した上で、その生を悼んでいるのであろう。そして、「我」の意識を極限まで捨て、同じく苦悩した史上の人物に成り代わって「書く」ことによって、はかない個人の存在を超える書を遺した司馬遷に、李陵・蘇武を超える価値を見出しているのである。

## 注

(1) 『李陵』原稿は、題名のない草稿と五枚分の浄書原稿が遺されたもので、深田久彌が仮に『李陵』と題をつけた。「出来るだけ私の主観を入れない、淡白な題を選んだつもり」(深田久彌『中島敦君の作品』 原題『中島敦の作品と私』昭29・4・30『昭和文学全集35中島敦・武田泰淳・田宮虎彦集』月報 角川書店)であるという。

(2) ヤマサ醤油発行『御台所當座帳』の余白頁に『南島譚』に関わるメモと共に、作品『李陵』に関わる年表が記載されたものである。村田氏が『中島敦『李陵』の創造』において指摘されるように、中島はこの年表で、李陵の出生を元光二(前三三)年とし、天漢二(前九九)年の項に「陵降虜。35」と年齢を設定している。

(3) 中島蔵書『漢書』中、圈点が打たれた箇所、作品『李陵』の内容に関わると見られるのは以下のものである。

〔李廣蘇建傳〕

・「文帝曰惜廣不逢時令當高祖世萬戶侯豈足道哉」

・「盛秋廣在郡匈奴號曰漢飛將軍避之數歲不入界」

・「廣曰諸校尉亡罪乃我自失道吾今自上簿至莫府謂其麾下曰廣結髮與匈奴大小七十餘戰今幸從大將軍出接單于兵而大將軍徒廣部行回遠又迷失道豈非天哉且廣年六十餘終不能復對刀筆之吏矣遂引刀自剄」

・「上以問大史令司馬遷遷盛言陵事親孝與士信常奮不顧身以殉國

家之急其素所畜積也有國士之風今舉事一不幸全軀保妻子之臣隨而媒藥其短誠可痛也且陵提步卒不滿五千深諒戎馬之地抑數萬之師虜救死扶傷不暇悉舉引弓之民共攻圍之轉鬪千里矢盡道窮士張空拳冒白刃北首爭死敵得人之死力雖古名將不過也身雖陷敗然其所摧敗亦足暴於天下彼之不死宜欲得當以報漢也」

・「武罵律曰女爲人臣子不顧恩義畔主背親爲降虜於蠻夷何以女爲見且單于信女使決人死生不乎心持正反欲鬪兩主觀禍敗南越殺漢使者屠爲九郡宛王殺漢使者頭縣北關朝鮮殺漢使者即時誅滅滅匈奴未耳若知我不降明欲令兩國相攻匈奴之禍從我始矣」

・「武曰自分已死久矣王必欲降武請畢今日之驪效死於前陵見其至誠喟然歎曰嗟乎義士陵與衛律之罪上通於天因泣下齧衿與武訣去」

・「陵雖驚怯令漢且貴陵罪全其老母使得奮大辱之積志庶幾乎曹柯之盟此陵宿昔之所不忘也收族陵家爲世大戮陵尚復何顧乎已矣令子卿知吾心耳異域之人豈別長絕」

・「武留匈奴凡十九歲始以驪壯出及還須髮盡白」

(4) [Gobi] [Altai] は各々モンゴル語で「砂漠」「金の山」の意(世界地名大事典昭49・1朝倉書店)。中島敦蔵書の『新制最近世界地圖増訂改版』(昭14・12三省堂)中、「第五圖支那(中華民國)」には、「a. 鄧居水」「b. 姑且水」「c. 余吾水」の書入れが見られ、『李陵』創作との関連が村田氏『中島敦『李陵』の創造』において分析されている。この図には「ゴビ砂漠」「アルタイ山脈」と記載される。

(5) その他、典拠における李陵投降の場面は次の通りである。

〔史記 李將軍列傳〕「虜 急に撃つて、陵を招降す。陵曰く、

『面目の陛下に報ずる無し』と。遂に降る。』

〔漢書 匈奴傳〕「單于陵を圍み、陵匈奴に降り」

〔文選 答蘇武書〕「而るに賊臣之に教へ、遂に便ち復た戦はしむ。故に陵免るを得ざりしのみ」

(6) 『李陵』中、司馬遷が「孔子に倣つて、述べて作らぬ方針を執つた」という箇所は『史記』『太史公自序』における司馬遷と晁遂との問答を典拠とするが、中島は司馬遷の方法を「孔子のそれとは多分に内容を異にした述而不作」であつたとし、「後世人の事實そのものを知ること妨げる様な餘りにも道義的な斷案」ではない、「事實を作り上げる一人々々の人間についての探求」「未來の者に當代を知らしめるための用意」がなされた史書、という構想を抱かせている。

(7) 『文選』『任少卿報書』の記述「假令僕法に伏し誅を受くるも、九牛の一毛を亡ふが若し。螻蟻と何を以てか異ならん。」を改変したものであろう。

(8) 第一章では、李陵が漢兵の傷の数に応じた働きを命じる場面、匈奴軍が火を放ったのに対し、迎え火で応戦する場面などに「李廣蘇建傳」の記述が利用されている。

(9) 蘇武の説話は、『宝物集』巻第三において沙弥性照（平康頼）の和歌に添えて記され、『平家物語』巻第二、『源平盛衰記』第八に

において、康頼の「卒塔婆流」の物語に呼応して語られる。陽明文庫蔵本『保元物語』下巻では、崇徳院が雁書のご事を引く記述がある。

(10) 『李陵』原稿中、李陵と任立政との別れから蘇武の帰漢にかけて記された用紙（三章二十八枚目）の右欄外に、「天ハ見ナイヤウデミテキル」とメモされている。

〔付記〕『李陵』の引用は、主に『中島敦全集1』（平3・10筑摩書房）に拠るが、必要な箇所については、神奈川近代文学館所蔵の原稿の写真と、写真版『原稿複製版中島敦『李陵』（昭55・11文治堂書店）に拠った。『史記』『文選』の引用は『国譯漢文大成』に拠る。

——わたなべ るり・東大阪大学助教授